

◇開催日時 平成29年9月20日(水)19時～21時

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野、新宮、島、中澤

◇内容

第4章「実践共同体における正統的周辺参加」『状況に埋め込まれた学習』ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳、産業図書株式会社、平成5年 の後半

1. 談話と実践

(1) 言葉の問題

・参加の正統性と周辺性へのアクセスに関わる問題である。

①参加の正統性に関して

AA：新参者はしだいにAAのモデルに近づいた見方ができるようになり、公の集会で上手な証言ができて、適切な理解を示したものとして他の人々から正当化してもらえる。

メキシコの霊媒：新入りの霊媒ははじめ一種独特の喋り方のパターンをもった多様な重要でない風変わりな精霊との交信であるが、最終的には、典型的なもつともステレオタイプな喋り方をする「大いに崇められた」神々である。

正統的周辺参加のプロセスを通して、成員としての喋り方が身についていく(ただしそのような喋り方をするを目的として学習したのではなく、実践を通してしだいに身につけていったものとして)

適切な語り方を身につける前後で、現実の実践にはなんら変わりはない

※外側から実践について語ることに、実践の中で語ることは違う

ことばを教え込むこと自体は、言語的实践での正統的周辺参加の一形態であるが、実際の実践共同体で学ぶものとは異なる(目的が違う)。

(2) 物語について

・徒弟制での物語(ストーリー)は意思決定に重要な役割を果たしている

問題場面では、その場面に類似したケースが居合わせた熟練者によって語られ、当面のケースにおける意思決定の共同作業がなされる。

物語は、状況に埋め込まれた知識のパッケージである(ことわざ・格言もそうなのかもしれない)

→ 適切な物語の蓄積を獲得すること、どういう場合にそれらを語るのが適切であるかを知ることが、熟練になるということの重要な一部になっている。

(3) 実践の中での語り

・実践の中での語りは、実践の中で語ること(進行中の活動の進展に必要な情報の交換)と実践について語ること(物語、共同体内での伝承)の両方を含んでいる。

①実践の中での語り

関与すること、焦点を当てること、注意を移すこと、調整をもたらすこと

②実践についての語り

成員たることをしるしづけること(成員であることの証、アイデンティティ)

記憶と内省の共同形態の支持(共同的な内省による語りの洗練化)

※新参者にとっての目的は、正統的周辺参加への鍵として、語ることを学ぶということである。

新参者の目的は、スキルよりは語ることそのもの

十全的参加者（熟練）が備えている全体性が語りには含まれている

- ・語りに含まれている知識と技能（問題解決の方法も含む）
- ・語ることを通して身につけ、周囲からも認められていく成員であることの証、成員としてのアイデンティティ
- ・共同的内省に関与することで、より洗練化された語り

2. 動機づけとアイデンティティ参加の効果

- ・ 正統的周辺参加：熟練者と見なされた実践者に受け入れられること
熟練者と交流することが学習を正統的なものにする（共同体に即したもの）
徒弟の視点からも価値あるものとなっている
- ・ 正統的に周道的なやり方で参加できるということは、新参者が円熟した実践の本場に広くアクセスできることを意味している。
- ・ 新参者であっても、実践共同体の部分的貢献には役立っている。その貢献の価値は、徒弟が習熟していくにつれて増大していく。
- ・ 実践では、人の労力がどのようにうまく、あるいはまずく、貢献したかがわかる機会が明確なので、周道的な場での正統的参加には自己評価の直接的根拠を提供している。
→ 日常の中に自己評価の機会がある。メタ認知力の育成に日記が有効かもしれない。
- ・ 共同体と学習者にとっての参加の価値のもっとも深い意味は、共同体の一部になるということにある。
→ 「～できる」ことに価値を置くのではなく、「～である」、存在に価値を置く。
その学校の生徒、学級の一員であることに誇りがもてるような環境作りが重要であろう。そこに、「伝統」「校風」「外部評価」の価値があるのかもしれない。
- ・ 十全的参加者になっていくということは、熟練した実践者としてのアイデンティティの実感が増大していくということである。（生活つくり方の価値はここにあったのかもしれない）
→ そのためには、自分を語ること、あるいは日記を通して自己評価の機会を持つことは重要かもしれない。語ることは日記を書くことよりも他者からの反応が実感できるので、より効果的であろうが。
- ・ 増大する参加の過程が学習の主要な動機づけになる。
- ・ 学校教育の問題点
 - ・ 教授方法の良し悪しのみに関心が集中している。
 - ・ 社会文化的であるはずの学習を個人的なものにしてしまっている。個人の変容にのみ拘泥してしまい、学習が個人の変容に効果的であったかどうかというように限定されたり、学習の本来の目的（アイデンティティの形成）がゆがめられたりする。
 - ・ 学習の商品化：テストに役立つことだけが価値ある学びとされがち。学習が社会・文化的実践になっていない。

3. 矛盾と変化 — 連続性と置換

- ・ 学習と教育は別物である。教授学的構造を学習の発生源と見なすのではなく、社会的実践の部分であると考えられる。
- ・ 社会的実践の構造には、予定されているカリキュラムや目標にかかわらず、学習の資源が多様に存在

している。

- ・学習というものが共同体内および世界全体と多様な関係をともなうものとしての、実践全体という観点から、理解されるべき。
- ・実践共同体のために世代をまたがって連続性を達成する手段としての正統的周辺参加と、十全的参加者が「新参者はやがて古参者になること」によって入れ替えられることとしての、同じ正統的周辺参加における置換の過程との間には矛盾がある。
- ・連続性と置換のコンフリクトは、社会的再生産、変容、および変化の基本的な矛盾である。
- ・連続性と置換の矛盾も、生産の社会的関係にも、労働の社会的再生産にも根本的である。
- ・古参者と新参者とがアイデンティティを確立して維持していく際の異なったやり方は、互いに対立し、実践とその発展について競合する考えを生み出してしまう。
 - 古参者はこれまでの実践に固執しがち。
 - 新参者は、これまでの実践を理解し、そこに参加し、それが存在している共同体の十全的成員になる必要がある。一方、社会は変化しており、共同体の連続性のためには、変化する社会に即した実践の変化が求められるのであり、将来の実践の発展（変化）に直接的に関わっていくのは、今の新参者であるという事実。（古参者ではなく）
- ・古参者と新参者は、協力者であると同時にライバルである。それは新参者の技術面上達によるライバル化（入れ替えられること）だけでなく、新参者によって実践の変容がもたらされる（自分のやり方が変えられる）ことへの反発心にもとづく。
- ・このコンフリクトは、共同体の変化をもたらし、結果として実践の洗練化をもたらしたり、時代への即応性をもたらしたりすることで、共同体の連続性を支えることとなる。
- ・実践そのものが動きの中にある。活動、それに関与する人々の参加、彼らの知識、さらに彼らの将来の見通し、これらが相互構成的であるから、変化こそが実践共同体および彼らの活動の根本的な特質である。
- ・未経験というのは開拓されるべき資産である。ただし、それは、その限界を理解しその役割を評価してくれる経験ある実践者によって支えられているという、参加の文脈でのみ役立つものである。
- ・内省に導かれることと、新参者の時折の貢献がきちんと取り上げてもらえることの両方のためには、参加の正統性が決定的に重要である。

→ ZPDとの共通点であるかもしれない。73 ページに「学習の機会を組織化しているのはこの関係ではなく、むしろ、徒弟の他の徒弟との関係であり、他の親方との関係である。徒弟自身の親方というのは、あまりにも遠い存在であり、あまりにも尊敬的であり過ぎて、新しい活動へのぎこちない試みでは関われないのである」とあるように、少し発達している他者との関わりがZPDでも重視されている。しかしここでは、その少し発達した他者に求められるものとして、①未経験（知らない・できない状況）にある者の意見や行動の役割を理解し（新しい変化・新しい解釈をもたらす源）、②内省に導いたり（再検討を促す）、③きちんと取り上げたりすることができるという能力が示されている。